FACULTY OF LETTERS

文学部生のリアルな！学生生活 Vol. 48

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、
文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。

MATSUDA YU

好奇心と挑戦心にあふれた大学生活

文学部人文社会学科ドイツ語文学文化専攻4年／
私立日本大学藤沢高等学校（神奈川県）出身
松田（まつだ） 優（ゆう）

はじめに

私の大学時代にタイトルを付けるならば、『好奇心と挑戦心にあふれた大学生活』です。テニスに明け暮れた高校時代とは異なり、大学では視野を広げてさまざまなことに挑戦することを目標にしていました。特に国際交流に興味があったため、充実した留学制度と奨学金制度、国際寮がある中央大学に入学を決めました。

ここでは常に何かに興味を持ち、行動をしていた私の大学生活を紹介します。

コロナ禍で始まるオンライン大学生活

思い描いていた大学生活に反して、自宅でひとり寂しい日々が始まりました。国際交流をしたくて入寮予定だった国際寮も、憧れであったサークルの新歓もすべてなくなりました。最終的に夏休みのみ国際寮には入寮できました。留学生と衣食住を共に過ごし、外国語で話す面白さ、異文化交流にさらなる興味を持ち、それが留学への意欲につながりました。

人生で最も勉強した9カ月

就職活動や4年での卒業を考え、2年次での交換留学を目標にしていたので、1年次秋の選考に向け、短期間でドイツ語のスキルを伸ばすことが必要でした。コロナ禍で先が見通せない中でも、留学をしたいという強い思いで、人生で最も勉強に打ち込む9カ月間を過ごしました。そして努力が報われ、テュービンゲン大学への交換留学生に選抜されました。選考内容は、語学資格試験、日本語とドイツ語の書類提出、ネイティブ教授と日本人教授による面接でした。

研究室や文学部事務室、国際センターの方々には選考の対策から奨学金制度、卒業単位、留学生活まで、たくさん相談し、バックアップしていただきました。

奨学金

留学が決まってからは、給付型奨学金取得に向けて取り組みました。結果、国際センターの「中央大学国外留学生奨学金」と文学部の「文学部長期留学奨学金」の2つの奨学金をいただくことができました。

奨学金選考基準は、国際センターは書類のみ、文学部は書類と面接がありました。留学先で学びたいこと、実行したいことをしっかりと計画し、留学への意欲をアピールしました。

人生の転機となった1年間

ドイツ語学習1年半で始まった留学生活は、決して簡単なものではありませんでした。しかし、不思議と不安は一切なく「何事も恐れずに挑戦する」という信念を持っていました。今考えると、ドイツ語学習歴1年半の私が充実した留学生活が送れたことに驚きです。「自分の可能性」を知る貴重な機会となりました。

好奇心と挑戦心に突き動かされた1年間

ドイツの食文化や労働環境を知りたいという思いから、直談判して日本食レストランでアルバイトを始めました。勤務中に使う言語はドイツ語でした。敬語や新たな単語を日々学び、日本とは異なる

1

3

3

1 イタリア登山 21 人と親戚家族と　2 誕生日に集まってくれた友達
3 留学先テュービンゲンの街並み　4 休日に友達とスケート

文化やマナー、食文化を体験する貴重な機会となりました。

ドイツ語を使う場をみずから作る

語学力を伸ばすため、テニスクラブや「タンデム」で積極的にドイツ語を使う場を作りました。「タンデム」とは、母国語を教え合うパートナー制度で、私は5人のドイツ人学生と交流しました。

ドイツのリアルなクリスマスとイースター

クリスマスとイースター休暇は、友達家族のもとで過ごしました。ドイツでは、祝事は親戚家族みんなで祝うことが一般的で、クリスマスもイースター祭も25人以上もの親戚が集まり、食事やおしゃべりを楽しみました。

ドイツ人21人と日本人ひとりで1週間の登山旅行

ドイツ人友達の親戚家族21人とイタリアへ登山旅行に出掛けました。日本人は私ひとり、会話はドイツ語のみという環境で、過酷な登山を耐え抜けるか不安でしたが、千載一遇の機会だと思い、恐れず飛び込みました。やはり心身ともに鍛えられる1週間となりましたが、標高3000mからの絶景やドイツ人家族の温かさを味わい、ドイツらしい自然の楽しみ方を体験する貴重な機会となりました。

最後に

大学時代は自分の好奇心と挑戦心に従って多くの経験をしたことで、「自分の可能性」を広げることができました。卒業後はこの経験を活かし、グローバルに活躍する社会人をめざします。

何に興味を持つかは人それぞれだとは思いますが、大学時代は恐れずに挑戦することが大切かと思います。皆さんも最後の学生生活を有意義なものにしてください！

文学部だより

学生が成長するとき

大学で学生は飛躍的な成長を遂げます。学問の面白さに気付き、みずからの問いを探究し、仲間と議論を深めていく中で、彼らの顔つきや言葉は劇的に変化していきます。その変化の一端をご紹介します。

教育学専攻の3年次必修科目「教育実地研究」は、自分たちで問題関心を出し合って一つの調査地域を設定し、テーマに分かれて学校や施設、行政などの教育現場に赴き、4泊5日の実地踏査を行った後に報告書にまとめる授業です。長い時間をかけて皆で作り上げる負担の多い授業ですが、これを経験した学生たちは大きく成長します。なぜなら、調査に係る一連の作業に「自分たちで」試行錯誤しながら取り組んだ過程と、問題意識をもって臨んだ現場で得た生の体験が、彼らを「内面から」大きく揺さぶるからです。

調査にあたり、依頼文の作成、アポ取り、日程調整、電話やメールのやり取り、現地交通・宿泊の手配、報告書原稿の校正や礼状の発送等、すべてを学生主体で行います。もちろん教員・事務もサポートしますが、たとえば電話のかけ方一つを見ても、最初はぎこちなかった敬語や交渉術が、回数を重ねるごとに自信を持った受け答えに変わっていきます。大学の名を背負って実社会の大人とやり取りする経験は、基本的なビジネスマナーを習得する機会にもなり、時に苦労や失敗もありますが、先方から激励の言葉を頂くこともあります。自分たちなりのノウハウと経験を積み重ねた学生の言動は、その後より主体的、積極的になり、多少困難があっても何とかなる、何とかできるはずという見通しと自信を伴ったものへと変わっていきます。

大学には、あちこちに主体的な学びのための「仕掛け」があり、それをサポートするための制度や場が複数用意されています。私たち研究室スタッフの支援もその一つです。教員とはまた違った立場で、心の中でエールを送りながら、日々の学生の成長を見守っています。

教育学研究室室員　西野（にしの） 加奈（かな）